

「沖縄はアジアと日本の『架け橋』」

2020年06月22日

『週刊金曜日』の6月19日号に、防衛ジャーナリストの半田滋氏の「沖縄はアジアと日本の『架け橋』の役割を果たせ」と題する、沖縄の基地問題と沖縄の将来を展望する記事が掲載されていた。沖縄の将来を展望する視点に賛同したので、紹介したい。

玉城デニー沖縄県知事は沖縄の将来像を描くために昨年、有識者を集めて「米軍基地問題に関する万国津梁（しんりょう）会議（以下「津梁会議」）」を設置した。「津梁」とは「架け橋」という意味で、玉城知事の沖縄を万国との架け橋にしたいという思いを込めたものと思われる。会議の議長は、柳沢協二元内閣官房副長官補（元防衛官）で、委員は、野添文彬沖縄国際大学准教授、添谷芳秀慶応大学准教授などである。

普天間飛行場は「世界一危険な基地」と言われ、代替として、現在「辺野古基地」が造られている。2003年、ラムズフェルド元国防長官が普天間飛行場を視察して「世界一危険な基地」と漏らした。この言葉は別の基地を造ろうという意図を持つ言葉であったのではないか。普天間飛行場の返還が発表された時、皆が喜んだが、代わりに辺野古に基地を造ると聞いた。沖縄の基地は、占領されていた時、銃とブルドーザーで強引に造られた。今、基地を新たに造れば、県民が承認したことになる。沖縄県民は辺野古新基地の建設を認めないと、諸々の選挙で、また、7割を超す人々が建設反対の民意を示してきた。数年前、岩波の『世界』に、辺野古の海底には軟弱地盤があり、基地建設はできないと、図解入りの克明な論文が掲載されていた。私は、建設は中止になると思っていたが、政府は辺野古以外にはないと、民意を一顧だにせず、また工事は可能として、建設工事を強引に進めている。防衛省は新型コロナウイルス感染症拡大が進む4月21日、軟弱地盤の埋め立て工事をめぐる設計変更を沖縄県に申請してきた。安価に見積もった政府試算でも、約9300億円という莫大な税金を投入することになる。勾配のある滑走路ができれば、どうするのか。

「津梁会議」は、今年の3月、玉城知事に「提言」を公表した。1) 辺野古新基地計画は技術的、財政的にも、完成させることは困難である。基地建設計画を見直し、普天間飛行場の危険除去と運用停止を可能にするため、海兵隊航空部隊の訓練の県外・国外移転を進める。日本、米国、沖縄の有識者からなる専門家会合を設立し、日本と、日米同盟にとって有益な打開策を見出す。2) 沖縄の米軍基地の抜本的な整理縮小を図る。日本全体の面積の0.6%に過ぎない沖縄に、在日米軍専用施設の7割が集中している。本土にあった基地が沖縄に移されたケースが多い。在沖海兵隊を本土の自衛隊基地に分散移転し、自衛隊と米軍基地の共同使用を進める。日米地位協定の改定・改善し、基地負担を見直す。3) 沖縄を、「アジア太平洋地域の結合点（ハブ）」としての沖縄にする。政府は、安全保障に関して緊張が高まっていると、安保関連法の制定や防衛費の増大を図り、抑止力強化を目指しているが、「津梁会議」は、「抑止力は唯一最善の政策ではない。対話や緊張緩和のための地域協力ネットワークの構築にも目を向けるべきだ」と提言している。緊張緩和や信頼醸成が今後の政治課題になるので、沖縄は「人間の安全保障」を議論する会議や関係機関と連携して「アジア太平洋における地域協力ネットワークのハブ」となることを目指すべきである。沖縄は戦争で苦しんで来た。だから、アジアのよい立地にあることを用いて、アジアに平和を構築していく「平和のハブ」として、世界の架け橋になっていくことを望む。

提言は、絵空事と言われるかもしれないが、夢を持ち、夢を追うことが人間であることの証しではないか。私は、米軍基地は米国内に移転し、3)に賛同、期待する。